

# 中央義士会報

創立明治41年

令和3年12月発行 No73

## 目次

- ・新生中央義士会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事一同・・・・・ 1
- ・浅野内匠頭等保存事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 柿崎輝彦・・・・・ 2
- ・堀内伝右衛門記念顕彰碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮川政士・・・・・ 4
- ・小野寺丹歌碑建立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 萩原 栄・・・・・ 6
- ・・・ 引揚げルートを歩く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 柿崎輝彦・・・・・ 8
- ・・・ 池上本門寺を訪ねて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 柿崎輝彦・・・・・ 9
- ・・・ 自由広告・今期新入会員・業務報告・編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

## 新生中央義士会

令和三年五月三十日の理事会において、同日付で中島康夫前理事長の退任が議決され、富岡克副理事長を理事長代理として新体制による新生中央義士会が始動することになった。

中央義士会は、明治四十一年（1908）、当時九州日報（現西日本新聞の前身）社長で衆議院議員福本日南（本名 福本誠）が福岡市崇福寺（筑前福岡城主 黒田家菩提寺）に約五百人を集め開催した第一回義士会を起源とする。この年、日南は九州日報に『元禄快挙録』の連載を開始する。明治四十四年（1911）東京高輪泉岳寺における第



福本日南翁

四回義士会を経て、大正五年（1916）十二月十四日、泉岳寺で中央義士会の発会式が挙行され、創立委員長の福本日南が初代幹事長に就任する。

五年後の大正十年（1921）一月二十二日、日南は千葉県大多喜中学での講演中に脳溢血で倒れ病院に搬送された後、千駄ヶ谷の自宅で療養を続けていたが、同年九月二日に帰らぬ人となる。行年六十五歳。

同年、急遽亀岡豊二が二代目幹事長に就任すると、昭和八年（1933）には財団法人に認可され亀岡豊二幹事長が初代理事長に就任。三代目幹事長には海軍中将飯田久恒が、四代目には東京帝国大学史料編纂官で元禄赤穂事件研究の第一人者渡辺世祐博士が就任。この時期、史実の解明が飛躍的に深耕する。敗戦直後の昭和二十年（1945）にはGHQにより中央義士会も一度は解散させられたが、四年後の昭和二十四年（1949）に活動を再開し今日に至っている。

中央義士会創設時の規約に、「本会は赤穂義士の遺烈を宣揚し、名節を砥礪するを以て目的とする」とある。

砥礪とは研ぎ磨き務め励むことで、時代の変遷を重ねた結果、日常における基本的概念や価値観までもが変節するなか、今日まで設立趣意を矜持してきた。

日本国民にとって精神的文化の支柱とも言える義士精神を次世代へしっかりと継承すべく、当会の原点である根本史料による史実の研究を軸に、設立時の目的を見失うことなく、新生中央義士会を前進させていかねばならない。

この度、当会が以降も末永く繁栄発展するようにと、泉岳寺様からのご厚意により、義士の聖地萬松山泉岳寺を本部所在地とさせて頂くこととなった。併せて泉岳寺様からも理事をお迎えし、これまで以上に緊密に連携しながら、今も国民に愛され続ける忠臣蔵の発展に取り組んでいきたい。

十月十日には、新生中央義士会にご賛同ご参画いただける方々にお集まり頂き、「第一回忠臣蔵倶楽部」を開催した。午前中の泉岳寺講堂における懇談会では、当会がこれから歩むべき展望について述べてさせて頂いた。

（理事一同、文・柿崎輝彦）

# 浅野内匠頭墓修復報告

柿崎輝彦

平成三十年に開始された泉岳寺境内にある浅野内匠頭墓の修復工事が令和三年度中に無事完了した。

今回の事業は、浅野内匠頭墓域および夫人墓域の墓石の傾きを直し損傷が著しい外柵などを修復し、参拝者の安全確保はもとより史跡として整備し、後世に伝えていくことを目的とした改修工事である。令和三年三月三十一日に発行された事業報告書（浅野長矩墓及び夫人墓保存修理事業報告書 発行泉岳寺）を参考にしながら工事完成迄の経緯とその内容について報告させていただく。

浅野内匠頭及び夫人の墓をはじめとする赤穂義士墓域内の墓石や石塔は、複数箇所で経年劣化が進み、平成八年から同十一年にかけて修復工事が施された。このときの事業は、討入り三百年祭に合わせた五ヶ年計画の一環として実施されたものであった。

その後、東日本大震災で墓石が大きく揺らいだこともあり、今回の保存修理は以前のような応急処置的な修復ではなく、文化庁をはじめとした各分野の専門家からなる保存修理委員会を組織し、専門家の指導を受けて実施され、浅野内匠頭並びに夫人墓の墓石を完全に取り除いて行われた本格的な改修工事となった。

事前調査で、墓石についてはX線回析等による科学的技法を用いて石質を分析し、墓域内は精密測量による高低差や墓石のズレや傾きなどを詳細に測

定し、併せて地盤や地質についても調査した。

その結果、内匠頭の墓石は右側および後方に向かつて傾き、随所に亀裂や剥離などの損傷が確認された。一方の夫人墓の傾きはさらに顕著で、左側および手前に向かつて傾き、正面の剥離は広範囲にわたり、以前から月命日と戒名の一部が欠損（そのままに）したままである。

墓石は一度解体した後、地盤改良を施し、改めてもとの敷石から据え直し、再度墓石を基壇から垂直に組み直した。

とりわけ劣化が進んだ外柵門扉は金属部材を使って補強し、損傷が激しい箇所については新しい石材と入れ替え原状復帰した。因みに今回修復に代替した石は、古くから皇室や徳川家の墓石にも使用されてきた神奈川真鶴産小松石（安山岩）である。

何と言っても気になるのが埋葬品である。ところが今回は発掘調査が目的ではなく、あくまでも史跡の修復であり、調査過程において墓域内からは複数の遺物が出土したものの、調査過程で全て埋葬後に混入されたものと確認されている。

余談ではあるが、浅野長矩傳（原題 冷光君御傳記）によれば、内匠頭埋葬時の棺の中には、喧嘩の節の御小さ刀、御鼻紙、御足袋、御扇子等を入れたと記されており、仮名手本忠臣蔵の名場面「由良之助 此の九寸五分は汝へ形見」はあくまでも芝居のなかでの出来事である。

なお、本報告は、泉岳寺のご厚意によって、掲載したものです。ここにあらためて、感謝いたします。

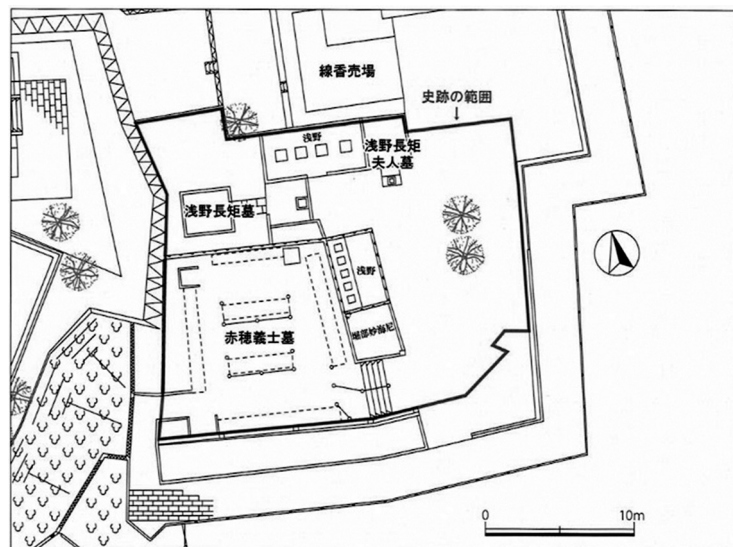


図 1-2 史跡範囲図



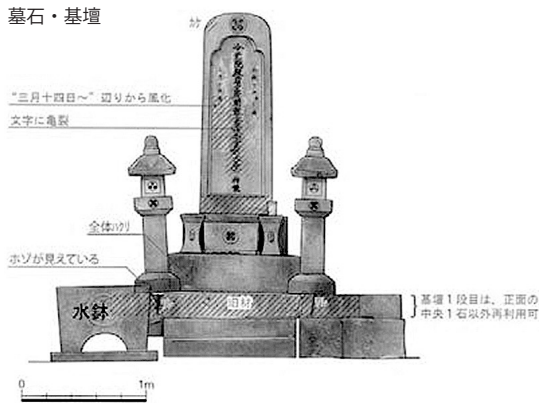
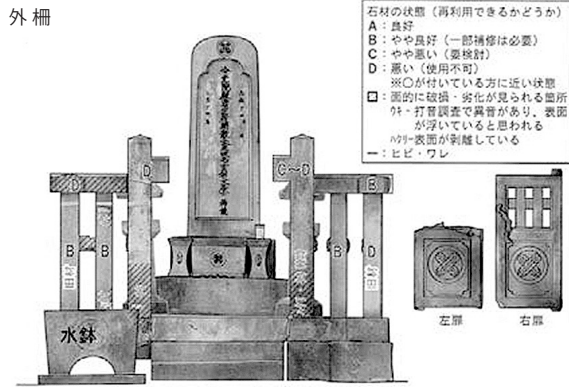


図 4-2 浅野長矩墓 石材調査立面図 (正面)

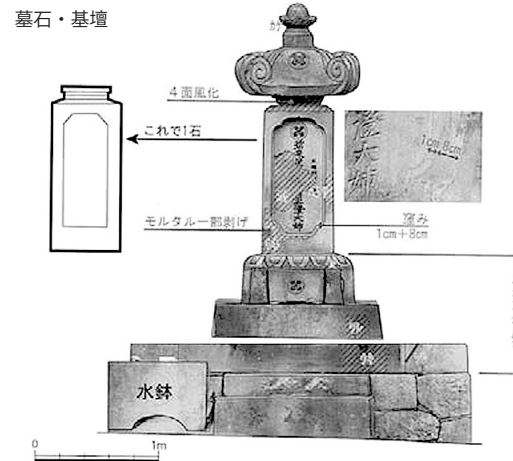
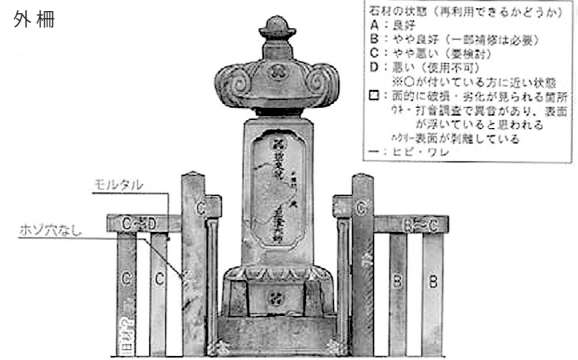


図 4-12 夫人墓 石材調査立面図 (正面)

1. 修理前・竣工写真

(1) 浅野長矩墓



修理前写真1 浅野長矩墓正面

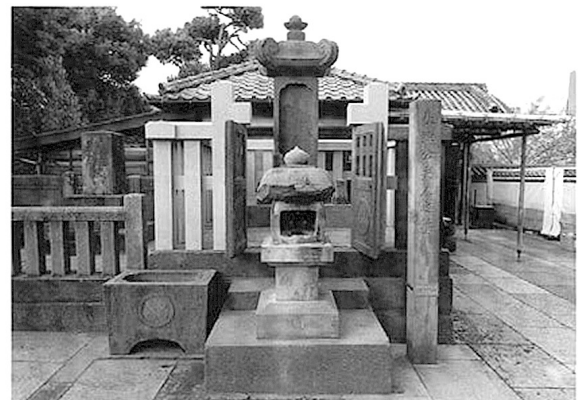


竣工写真1 浅野長矩墓正面

(2) 夫人墓



修理前写真6 夫人墓正面1



竣工写真6 夫人墓正面1

## 「堀内伝右衛門記念顕彰碑」

### 建立にまつわる赤穂義士と山鹿

平成堀内組 頭取 宮川 政士

#### 〈いきさつ〉

昨年（令和二年）二月四日、例年通りの義士まつりにあわせて「堀内伝右衛門記念顕彰碑」の除幕式が執り行われました。

平成十六年三月十四日、山鹿支部として中央義士会に入会して以来の大きな事業でありました。

遡ること平成十三年秋「忠臣蔵旗剣道大会」に山鹿より中学生が初参加、当時の北爪赤穂市長に送られて赤穂へと期待を胸に八千代座を出発しました。今年剣道交流は二十周年を迎えています。

翌年平成十四年二月四日、赤穂市と山鹿市は姉妹都市となり、以降、柔道、野球、合唱団を通じて子供たちの交流、ロータリーの姉妹締結、青年会議所姉妹JC締結と続きました。

それもこれも、一人のひとりの出会いが始まりました。それは堀内伝右衛門ご子孫、堀内研一様との出会いが赤穂義士との大きなご縁の始まりとなりました。

童田山の隠居所、花園小学校の手水石、熊本だからこそのお話を沢山お聴きしました。

ここに赤穂義士と山鹿の大きなつながりができました。

#### 〈事前〉

ある年の三月十四日、刃傷の日の当日、泉岳寺で内匠頭の供養祭と勉強会に参加していて、その後岩

手県大船渡の後輩の奥様がご逝去の為、一関へ向かいました。新幹線の中では勉強会で買った本を読んでいたところ、ちょうど田村右京大夫の部分を読んでいたところ、一関に到着、なんと右京大夫の領地が一関だったことを知り、鳥肌が立ちました。

翌日、お参りだけして東京へ戻り、夕方の飛行機まで時間があるため、歌舞伎座へ行くと、「大石最後の一日」上演予定、内蔵助を松本幸四郎が演じ、堀内伝右衛門を片岡我當丈が演じます。この時の片岡我當さんの立ち振舞いに又、鳥肌が立ちました。もし八千代座でやる時は絶対にこの人だと思いました。

#### 〈準備〉

毎年勉強会や催物に参加していく度に、「堀内伝右衛門」さんの存在が段々大きくなっていききました。六十数年前、小学生の遠足から始まって赤穂義士遺髪塔が、単に山鹿日輪寺にあるのではないことが分かってきました。

それは義士のお世話を、まごころ込めて遣り通した堀内伝右衛門さんの思いが籠っていました。

よし、堀内伝右衛門さんの像をつくらう、と考えました。この人なくして、ここまで赤穂義士が語られなかったかもしれません。

ここで困ったのは、赤穂義士関係の顔は像とか本とかにあります、伝右衛門さんの顔はまずありません。そんな時に唯一、浮かんだのが先日観た片岡我當さんの伝右衛門でした。そうだこの役にはこの人しかない、と思ったのはよいけれど、どうやってお願いしたものか、又々、困ってしまいました。そんな折、毎年八千代座で坂東玉三郎公演にやって来る松竹の方にお願ひしてみました。

そうすると「光栄です」と快諾あり、早くご本人にお会いしてお礼をと思いながら二、三年が過ぎてしまいました。

そんな時いただいた我當さんのお写真の顔がまさに堀内伝右衛門の顔でした。ならば、と像ではなくモニュメントにしようと思ひ、そこから一気に計画が前に進み始めました。

もう募金活動で、東京、赤穂へと向かう乗り物の中では楽しいことばかり考えていました。そして募金も思った以上に集まりました。

#### 〈当日〉

ちょうど、コロナ禍による自粛がスタートしたばかりの時でした。まだ人が集まるのもそれほど大変な時でなく、これも赤穂義士はじめ多くの方々の思いがあつてのことだと思ひました。

当日は、細川家十九代当主・細川護光様、伝右衛門ご子孫・堀内幸雄様、光比古様はじめ、東京・講談親睦会の皆様、赤穂の募金でお世話になった体育協会・文化協会その他各方面の方々、そして地元の方々の多くにも参列いただきました。

趣旨説明、祝辞、そして除幕式と無事に終わることが出来たのも多くの方々のご支援と、遺髪塔にまつわる、多くの先人の御魂のお見守りのお陰と強く感じました。

前夜祭（八千代座講談会）と当日に、若林鶴雲師の創作講談「堀内伝右衛門物語」外も皆さんにお聴きいただくことが出来ました。

#### 〈事後〉

お世話になった皆様へのお礼状の準備、東京歌舞伎座へは我當様へのお礼にも伺いました。



何のお礼も出来ませんでした。が、ご本人様にも大変喜んでいただき安心しました。

又その数か月後、遺髪塔の屋根瓦が傷んでいるとの事でした。百年の途中で一度、修理をしてあり、早速修理の手配をいたしました。その折、伝右衛門ご夫妻のお位牌もすでに消滅しているとの事、夫婦位牌、具足も整え、日輪寺に安置しました。

尚、この遺髪塔を見出した当時の八幡小学校校長の松尾雀彦さんの次男・松尾敬宇中佐が幼少の頃「赤穂義士（忠臣蔵）」の話をおばあちゃんに聴いて涙を流していたとの事、シドニー湾にて特殊潜航艇で逝かれた五月三十一日のご命日に屋根瓦の修理が完成いたしました。

又この前後には、赤穂高校ボランティアの生徒さん方が熊本地震のお手伝いにもえた時、山鹿へそして日輪寺へと足を運んでいただき、お参りと説明をお聞きいただきました。

又、義士討ち入りの前日には、NHKBSプレミアム「新日本風土記」で、赤穂事件にまつわる全国の縁の地の放送もありました。

山鹿の日輪寺、そして堀内組の皆さんの取り組み等のご紹介があり、全国アチコチの知人、友人からの連絡を沢山いただきました。

今まで七十年の人生の一つひとつが全く別々でなく、それがすべて繋がっていたんだということをしみじみと感じ、込み上げるものがありました。

〈今 後〉

来年（令和四年）、姉妹都市締結二十周年、遺髪塔百周年、討ち入り三百二十年、山鹿素行生誕四百年を迎えます。

そして五年後（令和八年）、堀内伝右衛門没後

三百回忌を迎えます。

今一つ心残りは義士が細川邸で使用した手水石の件です。これを遺髪塔脇に設置し、これからも永く、赤穂義士のこと、堀内伝右衛門さんのこと、思い出せる様になることを願っています。



除幕式の様子（満重義浩さん提供）



堀内伝右衛門顕彰碑

堀内伝右衛門記念顕彰碑の建立にあたって、中央義士の左記の方々よりご寄附をいただきました。

- 中央義士会様
- 富岡 克様
- 荻原 栄様
- 石束邦子様
- 高部通子様

# 小野寺丹歌碑建立

荻原 栄

元禄十六年六月十八日は、小野寺十内の妻・丹が亡くなられた日です。丹は、十内が切腹した後、京都本圀寺塔頭了覚院において四十五才で亡くなりました。亡くなられた同じ場所に葬られ、今もそのまま遺つて居るのは、元禄赤穂事件関係者では丹のみです。丹の墓については、中央義士会会報六十二号平成二十二年十二月発行に「小野寺十内妻丹女の墓地調査」として詳しいのでそちらをご覧ください。

当会では、現地において、平成二十二年に三百八回忌の法要を行いました。以降は管理している林昌院様にお願ひしていました。

今回、令和三年六月十八日に、当会の理事長代理富岡克氏が、丹顕彰のため、丹墓の隣に歌碑を建立。その除幕式と共に三百九十九回忌の法要を行いました。

泉岳寺からの出席者も含め、総勢二十名が京都林昌院に集合。午前十時から、林昌院住職河上正昌導師による法要が開始。丹ご子孫の能瀬様に続いて参列者全員が焼香を行いました。その後、歩いて五分ほど離れた丹墓地において、歌碑の除幕式を行いました。

歌は、

「筆のあとみるに泪のしぐれきて  
いひかえすべきことの葉もなし」

この歌が最も早く見られるのは、「堀内伝右衛門覚書」です。堀内伝右衛門覚書は、大石内蔵助ら十七名を預かった細川家の家臣堀内伝右衛門が書き残したもので、生の義士の言動を記録しています。その中に、原惣右衛門が小野寺十内が聞いたら怒るだろうと、笑いながら丹の歌を書いて、堀内伝右衛門に渡したことが書かれています。

除幕式では、河上正昌導師による読経、続いて碑文の朗詩を東京都吟剣詩舞道総連盟理事長毛塚静精様、祝辞を能瀬英和様、その後施主富岡克氏の挨拶が行われ、午前中に終了しました。



林昌院での法要の様子



丹墓と歌碑 正面が丹墓



小野寺丹歌碑



午後からは、バスで京都の元禄赤穂事件関係の史蹟を巡りました。

まずは、小野寺一族の墓のある西方寺、次ぎに吉田忠左衛門、沢右衛門、貝賀弥左衛門、妻おさんの合同墓（綿屋善右衛門建立）と赤穂義士の木像がある本妙寺、天野屋利兵衛のモデルとなった、綿屋善右衛門と大石内蔵助の母クマ、貝賀弥左衛門の娘お百の墓のある聖光寺へ行きました。最後に大石内蔵助が江戸へ出る前に滞在した梅林庵跡を訪ねました。梅林庵跡地は、京都市内でも観光地の新京極にあります。かつては跡地の石碑が建っていたのですが、今は取り外されてありません。場所は四条通か



歌碑前で参加者一同（写真の時だけマスクを外しました）  
前列真ん中で座っているのが河上住職  
河上住職の後ろが富岡ご夫妻

次の日もバスで史蹟を巡りました。

最初は山科の出雲寺、ここは將軍綱吉が、赤穂義士の処分について相談した、公奔親王が入寺し門跡寺院となった寺で毘沙門堂の名で有名です。

つづいて瑞光院、浅野家の祈願寺で浅野内匠頭の供養塔と四十七士の供養塔があります。昭和三十七年に上京区から移転しました。さらに大石神社から近くの大石内蔵助の旧居があつた岩屋寺へ行き、そこから京都市内に戻り、元禄十五年七月二十八日に円山会議を行い討入りを決定した、円山の重阿弥跡へ。寺井玄溪の墓のある長楽寺、伏見に飛んで、大石内蔵助が遊んだ撞木町へ行き、充実した史蹟巡りでした。この史蹟巡りについては、当会の柿崎専務理事に計画と案内を行っていただきました。

ら新京極へ入り、花遊小路を右へ三十mほど入った左側にありました。斜め向かいの時計屋のご主人にお話を伺うと、昭和五十年頃までは、確かにあつたとのこと。その場所を教えてくださいました。



梅林庵跡の碑があつた場所  
左側の柱の横の辺りがその位置



撞木町遊郭跡地の碑



岩屋寺 大石内蔵助旧居跡

## 引揚げルートを歩く

柿崎輝彦

浅野内匠頭の命日にあたる三月十四日、中央義士会恒例の両国旧吉良邸跡から高輪泉岳寺までの義士引揚げルートを辿る愛好会を実施した。

当初は義士等が引揚げた旧暦の十二月十五日（吉良邸に討入った翌日）にあたる一月三十一日に予定していたものが緊急事態宣言の延長に伴い延期を余儀なくされたものである。

ここで暦に関する豆知識を紹介しておきたい。じつは旧暦の十二月十五日がイコール一月三十一日ではないと言うことである。新暦では四年に一度閏年を設けて暦を調整しているが、旧暦では不規則に二年ないし三年に一度閏月を設けて暦を調整していたことから、閏年は一年が十三ヶ月となる。このあまり聞き慣れない閏月は、歳中置閏法という調整法により毎回異なる月に出現し、閏年であった元禄十五年には八月の次に閏八月が設けられている。大石内蔵助が主君の仇討ちを期して蟄居先の山科から京都梅林庵に移ったのがこの閏八月であった。因みに、その三年前（元禄十二年）の閏年には閏九月が、三年後（宝永二年）の閏年には閏四月が設けられ、暦には絶えずズレが生じることから、同じ旧暦の十二月十五日であっても新暦に置き換えると元禄十四年は一月十二日、元禄十六年では一月二十一日になっており、旧暦の十二月十五日が新暦の一月三十一日であるのは元禄十五年に限ったことである。

また、刃傷事件のあった元禄十四年三月から討入りのあった元禄十五年十二月までを現在の暦で換算すると一年九ヶ月となるが、元禄赤穂事件を扱う

場合には、旧暦の閏八月を含めた一年十ヶ月とするのが一般的である。

愛好会当日は、依然コロナ禍の影響下にあったにも関わらず、十八名もの方にご参加頂いた。奇しくも、当日の集合場所である両国駅では、隣接する国技館において大相撲春場所が開催されており、駅周辺では日頃滅多にお目にかかることのない丁髷姿の大男らが行き交っていた。

定時になり一同旧吉良邸跡へと移動。現地では、その広大な敷地（二千五百五十坪）の概要や表門・裏門などの位置関係を説明したのち、討入り当夜の様子を解説させていただいた。裏門を出て直ぐ左手には最後の集合場所となった前原伊助の店跡があり、近年になって敷地内には史跡案内板が設置されている。

裏門を出るといよいよ引揚げのスタートである。吉良邸を退散したあと一行が追手を想定し態勢を整え一時待機した旧両国橋東詰め（現両国橋のやや下流）を目指す。今日両国橋東南端には案内看板等はないものの大高源五の句とされる「日の恩や忽ちくたく厚水」の碑がある。これは下の句とされる上の句は宝井其角が読んだ「我がものと思えば軽し笠の雪」であると伝えられているが、明らかにのちの創作である。

両国橋から一つ目橋を渡り、旧新大橋跡の碑を過ぎたところから脇道へと入り、そのまま旧道を進むと正木稲荷にぶつかる。元禄当時はその横の道を進んだ先に万年橋が架けられていたが、現在は大通りに架橋されている。万年橋を渡った次の路地を右折して道なりに隅田川に沿って永代橋まで進むのが本来のルートであるが、近頃は快適さを求め、万年橋を渡って直ぐテラスに下り、そのまま隅田川沿いに進むのが恒例となっている。

次に目指す永代橋も引揚げ当時はもう少し上流に位置しており、元の場所にはモニメントが設置されている。

永代橋を渡り旧松平越前守の広大な敷地を迂回し高橋からさらに南下を続けると聖路加国際病院が見えてくるが、西側に隣接する聖路加国際大学辺りが旧浅野家上屋敷跡（八千九百七十五坪）で、南西の角には「都旧跡 浅野内匠頭邸跡」の碑と説明看板が設置されている。

ここは文豪芥川龍之介の生家でもあり、芥川はのちにお預けになった細川邸での大石らの様子や心情を綴った「或日の大石内蔵助」を執筆している。この辺りが引揚げルートのほぼ中間地点となっており昼食休憩を挟む。

後半最初の訪問地築地本願寺には、引揚げ途中に金子と共に自身の戒名などを結び付けて投げ込んだとされる間新六の槍が寺宝（非公開）として残されている。境内には新六の姉婿中堂又助が毛利家から切腹直後の新六の亡骸を貰い受け、中堂家の墓域に葬り墓を建てていたが、その後少なくとも二度の移設を経て、現在正門南側にある。又助は同様に新六の父喜兵衛と兄十次郎の亡骸も貰い受けようと奔走し、それぞれのお預け先である細川家と水野家にも掛け合ったが、屋敷に到着した頃にはすでに泉岳寺への埋葬が決定していたため断念している。

一行は築地本願寺から築地市場（当時は本願寺境内）を抜け、直ぐの路地を西に入り南下した。途中汐留の奥平家上屋敷門前で家臣桜井惣右衛門に誰何されたが、奥田孫太夫が経緯を説明すると、そのまま通過を許されている。

新橋（旧汐留橋）辺りでは吉田忠左衛門と富森助右衛門が自訴のため一行から離れ大目付仙石伯耆守邸へ向かっている。当時この辺りには脇坂淡路守



(現富士通本社)、松平陸奥守(現日本テレビ)、松平肥後守の広大な大名屋敷が続いており、現在道沿いの日本テレビ敷地内には一行が門前を通過した時の様子を記した説明板が建っている。その前を通り旧宇田川橋あたりから東海道に出ると只管南に向かつて直進を続け、金杉橋を渡り札の辻を過ぎ、さらには江戸急進派の一人であった高田郡兵衛が酒を持参し現れた三田八幡神社を横目に高輪大木戸跡を越えて泉岳寺に無事到着。

その後、泉岳寺から程近い大石内蔵助ら十七人がお預けになった旧細川家下屋敷(後に中屋敷)を訪問し、一同切腹の地に向かつて頭を垂れ合掌した。

## 池上本行寺を訪ねて

柿崎輝彦

令和二年九月十九日と二十六日の両日、大石家系譜『大石家系圖正纂』を作成した大石郷右衛門良麿が眠る池上本行寺(大田区池上)を訪ねた。両日とも雨模様であったにもかかわらずのべ十九名の方にご参加いただいた。

集合場所は東急池上線池上駅。池上本行寺までは徒歩約十五分。正式名は長崇山大坊本行寺といい、日蓮宗大本山池上本門寺の西側の山裾に隣接する子院で、日蓮聖人入滅の地として知られ、創建は鎌倉時代中期の弘安六年(一二二八)と由緒ある寺院である。

本行寺を菩提寺とする大石郷右衛門良麿は元赤穂浅野家臣大石無人良総の長男として寛文十二年(一六七二)近江国大津に生まれ、四歳違いの弟に大石三平良穀がいる。

この親子は義を好み、予てから江戸在住の浅野家

家臣と親交があり、とくに無人は同じ年の堀部弥兵衛とは昵懇の間柄であった。浅野家改易後は江戸に在って吉良の動静を探り、堀部等にその情報を提供するなど赤穂浪士等を献身的に支援しており、国学者羽倉斎(後の荷田春満)に依頼して十二月十四日の吉良上野介在宅を突き止めた功労者でもある。

元禄十五年十二月十四日の討入り当日、郷右衛門・三平兄弟は大石内蔵助等が集う隅田川右岸にあった葉研堀近くの両国矢ノ倉米沢町の堀部弥兵衛宅を訪れている。この時のようすは『佐藤條右衛門覚書』に詳しい。さらに、三平らは従兄弟にあたる大石瀬左衛門の出陣を励ますと、無人・三平親子は未明に決行された吉良邸討入りにも斥候し周辺警護にあたっている。しかも、無人は以前からこの度の義挙に加えてもらおうと進言もしていたが、弥兵衛に丁重に断わられている。当時、無人と三平は浪人の身であったが、郷右衛門については弘前津軽家の家臣であったこともあり討入りへの同道を遠慮している。

無人は寛永四年(一六二七)江戸櫻田の主家長屋に生まれる。浅野長重、長直の二代に任せ、その後江戸から赤穂に移り暮らしていたが、在任中の御役目に納得出来ないことがあるとして、一通の書「我が意趣」を残し自ら進んで寛文六年(一六六六)九月二日に浅野家から離れ浪人している。赤穂を立ち退くと大阪を経由して江戸に出たあとは転々としたのちに近江国大津に移り住んだ。そこで生まれたのが長男郷右衛門である。童名は靄松丸、後に金彌、與市郎、郷右衛門、莊司と改め、諱も延貞、武朝、與親、良戒、良麿と生涯何度も改めている。

無人の父大石八郎兵衛が大石瀬左衛門の祖父でもあることから、郷右衛門三平兄弟は大石瀬左衛門とは従兄弟である。この関係性は瀬左衛門の親類書

でも確認できる。また、八郎兵衛の兄が大石内蔵助良勝(良雄の曾祖父)であったことから無人親子は大石内蔵助とも親戚関係にあった。詳しくは大石家系図を参照。そのため彼等はすでに浅野家家臣ではなかったものの元禄赤穂事件に関連して随所にその名前が登場する。その関係性を示すかのように、大石内蔵助は泉岳寺に引き揚げた際に、自ら所持していた呼子の笛に添状を付けて無人・三平の親子に贈っている。

郷右衛門は元禄六年(一六九三)、近衛基熙の斡旋により弘前津軽家に新知二百石を賜り小姓組頭として仕官する。ここに郷右衛門を初代とする津軽大石家が誕生すると順調に加恩を続け四百石の用人へと出世している。ところが享保十三年(一七二八)同家家老らとの不和から浪人する。その家老については『大石家系圖正纂』の良麿傳に詳しい。

奸曲ノ家老兩人ト良麿心中不和タルニ依テ也〔是レ偏ニ私意ヲ以テセス、政務二就イテ止ム得ザル所ナリ、其ノ奸佞邪曲ノ者、一人ハ津軽校尉ト云イ、弘前ニ在リ、一人ハ佐藤帶刀ト云イ、弘前ニ在リ、校尉ハ明年二月朔日、急死、病死トモ、横死トモ云フ、不忠不義ノ積悪密謀ノ冥罪タル哉、帶刀ハ元文二、六、三、家老役召シ放サレ、先年賜フ所ノ稱號及ビ一字、家紋等取上ゲ、閉門、驕奢、不義甚シキ故也、同月廿六日、閉門赦免、知行三千石取放チ四男ニ新知五百石ヲ賜フ、九月十日、帶刀ハ急ニ病死〔實ハ自滅ト云ウ〕天罰ノ然ラシムル所カ、良麿ハ同年潤十一月十九日、歸參〕

上司にあたる津軽校尉と佐藤帶刀の両家老を奸佞邪曲ノ者(奸佞とは心が曲がっていて悪賢く人

に媚び諂う。邪曲とは心が捻くれて素直でないこと」と筆誅し、両者の悲惨な末路を書き留めている。一方の郷右衛門は約十ヶ年の浪人生活を経て元文二年（一七三七）に再び弘前津軽家に帰参が叶っている。その後、寛保二年（一七四二）七十二歳の時に新知二百石を賜り取次役となる。寛延二年（一七四九）に伴郷右衛門良任に家督を譲り隠居すると翌寛延三年（一七四九）八月三日に江戸で没す。享年八十三歳、法号は莊入院一乘寂夢居士。父無人ともども長生きの家系である。

ところで、良磨を弘前津軽家に斡旋した近衛基熙とは、近衛家二十一代当主の公卿のことで、生涯書き続けた日記『基熙公記』の中に浅野内匠頭による吉良上野介への刃傷事件、いわゆる松之廊下事件を「珍事々々」と記した人物である。

池上駅を出発した一行は本行寺に到着。目指す津軽大石家の墓域は本堂右奥の階段を登った斜面中腹にあるが、広大な墓地にその位置を示す案内看板等は一切見当たらず判りづらい。墓域に辿り着くとそこは区画がはっきりとしないものの歴史を感じさせる六基の墓石が寄り添うように建っており、何れも墓石正面には大石家の家紋である二ツ巴とその下に戒名が彫られ、側面にはそれぞれの行跡が刻まれている。どの墓石もそれほど風化が進んでないことから十分に判読可能で、墓石に刻まれた戒名から、この墓域には無人の室、郷右衛門良磨夫妻、その伴郷右衛門良任夫妻など十二名が眠っていることが判る。墓石の詳細な位置関係や該当者については津軽大石家墓域図を参照されたい。

昭和二十八年十二月五日、当会役員で元禄赤穂事件研究の第一人者でもあった故井筒調策理事が同地を訪れている。この時、それまで長年所在不明であった無人夫人や郷右衛門夫妻の墓を発見し、その

時の感動を直後の当会会報に寄稿している。

その墓域内において、無人および郷右衛門・三平兄弟の事績や大石家との関係、さらには津軽大石家と堀部親子との交流などについて詳しく解説した。何と言っても特筆すべきは、『大石家系圖正纂』の大石良總傳によると、吉良邸討入りに三平（討入り当時二十八歳）と共に斥候した無人は、かつて仕えた浅野長直公より拝領した小手腰当を着け一人気を吐き、武装して吉良家門前に駆けつけていたことである。この時無人は義士最年長の堀部弥兵衛と同じ七十六歳であった。その後も江戸に在り、当時の平均寿命を遙かに凌ぐ八十六歳の天寿を全うしている。

良磨のひ孫にあたる良<sup>よしな</sup>遂以降は主君の津軽家と縁がある弘前本行寺（青森県弘前市新寺町）を菩提寺にして代々継承されていたが、偶然にも同寺を菩提寺とする当会会員の情報によると、近年津軽大石家の墓石は他所に移転され、現在墓域は更地になっているとのことである。

続いて本行寺本堂奥にある日蓮聖人入滅の地『ご臨終の間』を見学した。

この地はもともと池上一帯を支配していた豪族池上宗仲の公邸跡で、宗仲は熱心な日蓮聖人の信徒でもあった。日蓮聖人は入山していた身延山久遠寺（山梨県身延町）で迫り来る自己の死を悟ると、両親の墓参を兼ね常陸の国の温泉場に向かった。ところが、途中でさらに衰弱が進み、池上氏の館に暫く逗留していたが程なくして亡くなった。

『ご臨終の間』は日蓮聖人がお亡くなりになった仏間に建てられたもので、入滅するまでの約一ヶ月間、多くの弟子に講義をされた場所でもある。こ

の『ご臨終の間』は東京都の史跡に指定されており、日中は自由に入ることができる。お堂には日蓮聖人が講義の際に寄り掛かったとされる柱の一部が保存されており、今でも直接触れることができる。本堂の廊下を伝って裏手に広がる池を配した見事な庭園を拝見し本行寺をあとにした。

その後、有志等で隣接する池上本門寺の墓域を訪ね、元禄赤穂事件とも所縁のある細川綱利室、上杉綱憲室や昭和のヒーロー力道山、元自由民主党副総裁大野伴睦、政財界のフィクサーなどとも呼ばれ口ツキード事件でも知られる児玉誉士夫など著名人の墓を参拝し今回の愛好会は終了した。

中央義士会  
副理事長 富岡 克

東京都中央区在住

切腹最中  
SEPPUKU shimbashi

東京都港区新橋 4-27-2

TEL 03-3431-2512

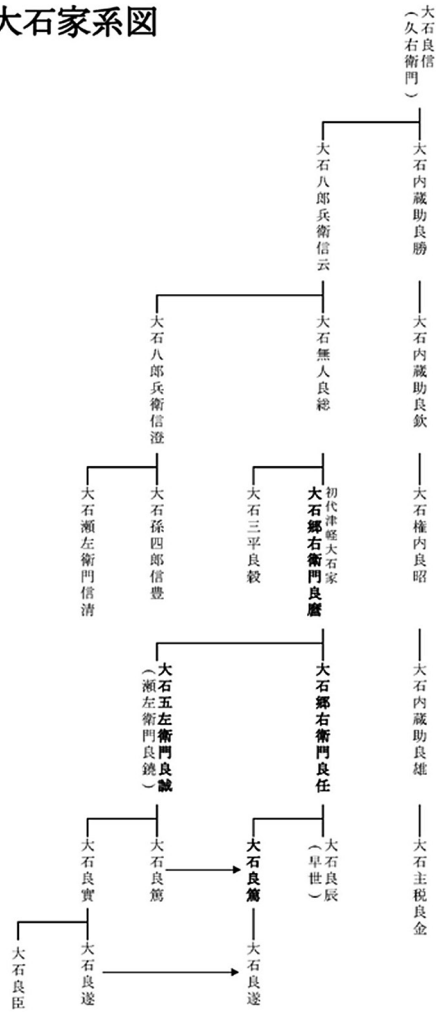
FAX 03-3431-2548

http://www.e-monaka.com

地方発送承ります。



### 大石家系図



※太字 池上本行寺に墓がある



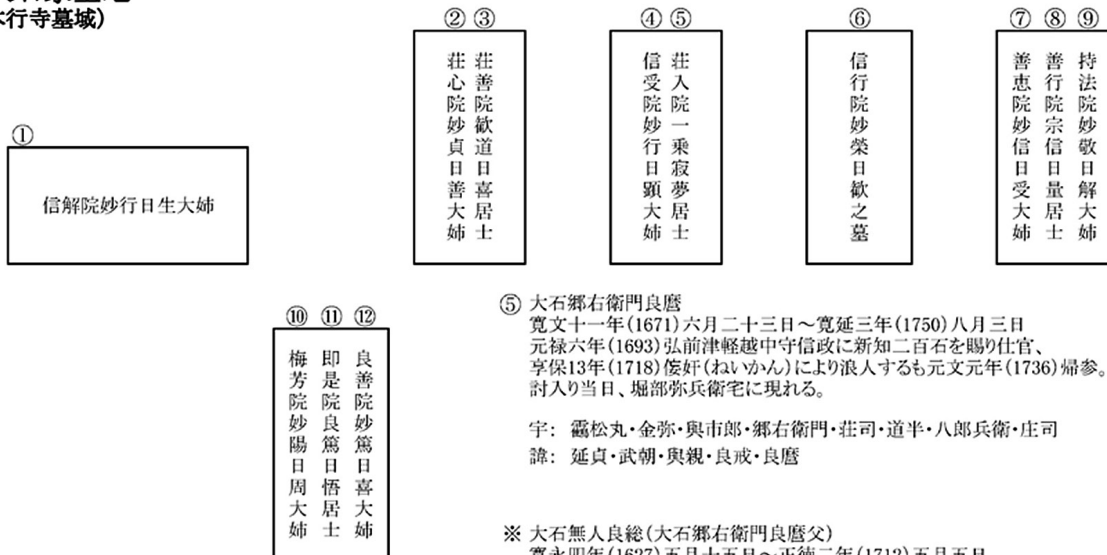
津軽大石家墓域



令和2年9月19日の参加者

2020.09.19・26 柿崎輝彦

### 津軽大石家墓地 (池上本行寺墓域)



⑤ 大石郷右衛門良麿  
 寛文十一年(1671)六月二十三日～寛延三年(1750)八月三日  
 元禄六年(1693)弘前津軽越中守信政に新知二百石を賜り仕官、  
 享保13年(1718)倭奸(わいかん)により浪人するも元文元年(1736)帰参。  
 討入り当日、堀部弥兵衛宅に現れる。

宇: 靄松丸・金弥・與市郎・郷右衛門・莊司・道半・八郎兵衛・庄司  
 諱: 延貞・武朝・與親・良戒・良麿

※ 大石無人良総(大石郷右衛門良麿父)  
 寛永四年(1627)五月十五日～正徳二年(1712)五月五日  
 浅野長重に仕えるものち浪人。  
 討入りに斥候。  
 墓は蟠桃园(京都市右京区花園妙心寺町)

※ 大石三平良毅(大石郷右衛門良麿弟)  
 延宝三年(1675)十二月十一日～寛延二年(1749)十一月六日  
 近衛閑白に仕えたのち浪人その後高松城主松平讃岐守頼豊に仕える。  
 討入り当日、堀部弥兵衛宅に現れ、討入りにも斥候。  
 墓は福巖寺(通称赤門寺 墨田区東駒形)

- ① 大石良遂【良實の子で良篤の嗣子】室(千)
- ②③ 大石郷右衛門良任・室(与禰)
- ④⑤ 大石郷右衛門良麿・室(幾和)
- ⑥ 大石無人良総室(龜)
- ⑦⑧⑨ 大石良篤母・大石良鏡・大石良鏡室(民)
- ⑩⑪⑫ 大石良篤室(津彌)・大石良篤  
大石良篤室(良遂)を養う

2020.09.19 柿崎輝彦

<p>総合建設業 株式会社 西山開発 代表取締役 <b>西山裕司</b> 岡山県倉敷市在住</p>	<p>中央義士会 常務理事 <b>荻原 栄</b> 中央義士会のホームページは <a href="http://www.chushingura.net/">http://www.chushingura.net/</a> によろ。 又は、中央義士会にて検索して下さい。</p>	<p>中央義士会 専務理事 <b>柿崎輝彦</b> 何でもご相談下さい。 〇九〇―二三八五―三三二四 横浜市北区在住</p>	<p>健康です、テニスをします！ <b>高松ローンテニスクラブ</b> オーナー 上原益雄 中央義士会 評議員 東京都練馬区在住</p>
---	---	--	--

**令和 3 年 中央義士会 業務報告**

年 月 日	項 目	備 考
R3.3.7	第 1 2 0 回 月一勉強会	新橋
3.14	愛好会 引揚げコースを歩く 両国―泉岳寺	柿崎専務理事他
4.11	第 1 2 1 回 月一勉強会	新橋
4.16	日本消防会館新築碑文案作成・日本消防協会へ送付	荻原常務理事
5.9	第 1 2 2 回 月一勉強会	新橋
5.30	理事会 中島理事長退任	新橋
6.13	第 1 2 3 回 月一勉強会	新橋
6.18,19	小野寺丹 歌碑建立 京都林昌院	富岡理事長代理
7.7	亀岡家と懇談	柿崎・荻原
7.11	第 1 2 4 回 月一勉強会	新橋
7.31	理事会	新橋
8.11	理事会	新橋
8.22	理事会・福本日南翁墓参・泉岳寺と懇談	泉岳寺・月島
9.5	理事会	港区リーブラ
10.10	第 1 回忠臣蔵倶楽部	泉岳寺・切腹地清掃他
11.7	第 2 回忠臣蔵倶楽部	泉岳寺・切腹地清掃他
12.5	第 3 回忠臣蔵倶楽部	泉岳寺
12.11,12,14	切腹地公開 会報 No73 発行	旧細川家下屋敷跡

<p style="text-align: center;"><b>編集後記</b></p> <p>今年、世界的にも当会にとっても大変な一年であった。これまで百年以上行ってきた泉岳寺での、当会主催の赤穂義士顕彰も中止となり、泉岳寺主催の法要だけとなった。また、当会の理事長も交代した。</p> <p>元禄赤穂事件は、現代風というとパウハラが原因である。江戸時代のパウハラを研究している団体である。もっとも、パウハラは、加害者にはその意識はないので、やっかいなのだが。</p> <p style="text-align: right;">編集 荻原 栄 校正 松岡康彦 印刷 進藤 務 (株)正天印刷社</p>	<p style="text-align: center;"><b>新入会員</b></p> <p>青木宣男 北広島市 沖田叙男 練馬区 海老澤有希子 足立区 野本好朗 三鷹市 小泉 敦 港区</p>
--	--